

京師桐城派の成立について

浅井邦昭

はじめに

曾國藩「歐陽生文集序」(『曾文正公文集』卷一)は、歐陽勳の遺集に対する序で、桐城派の系譜を端的に示した文章として知られる。これによれば、桐城派は姚鼐によって確立し、その教えは弟子を通して桐城、江西、廣西、湖南などに伝えられたとする。このうち、廣西への伝播については、朱琦、龍啓瑞、王拯(原名は錫振)らが吳德旋と呂璜の主張に同調し、その後「而も益ます其の術を廣めんことを梅伯言に求む。是れに由り桐城宗派 廣西に流行す(而益求廣其術於梅伯言。由是桐城宗派流行於廣西矣)。」といっている。ここで「桐城宗派」というように、曾國藩は、桐城派の正統が梅曾亮を通じて朱琦らに伝わったと見なしていた。

これまで論者は、姚門の文学活動に注目して、彼らが桐城派の発展に果たした役割を論じてきた¹⁾。そこで、今回は姚門のひとりである梅曾亮とその周辺人物の活動を取りあげることにする。朱琦ら廣西出身者以外にも、京師において、多くの知識人が彼から教えを受けた。梅曾亮の上京後の活躍について、姚鼐は「惜抱先生與管異之書跋」(『東溟文後集』卷十)で次のようにいう。

獨り伯言 戸部郎官爲ること二十餘年、植品甚だ高く、詩古文の功力與に抗衡する者無し。其の得る所を以て古文を好む者の爲めに倡導すれば、和する者益ます衆し。是こに于いて先生の説益

ます大いに明らかなり(獨伯言爲戸部郎官二十餘年、植品甚高、詩古文功力無與抗衡者。以其所得爲好古文者倡導、和者益衆。于

是先生之説益大明)。

最後の「先生」はふたりの師である姚鼐を指し、その文学主張は梅曾亮によって文壇に定着したという。彼は高潔な人格や詩古文への造詣において並ぶ者がなかったため、二十年あまりにわたって、京師で大きな影響力を持っていた。その間、彼を中心として、詩文の応酬や作品の批評などが活発におこなわれた。その結果、梅曾亮らはみずから桐城派の正統と見なすようになる。この党派意識は、それ以前の桐城派の人々とは性格が異なるため、本稿では「京師桐城派」と呼ぶことにする。この京師桐城派は、桐城派の発展において、特に重要な貢献をするようになった。

梅曾亮らの交遊については、柳春蕊『晚清古文研究——以陳用光、梅曾亮、曾國藩、吳汝綸四大古文圈子爲中心』(百花洲文藝出版社、二〇〇七年)などにすでに論考がある。彼らの文学活動のなかでも、本稿では酒宴と文学批評に注目し、彼らがグループとして結束していく過程を論じることにする。その上で、梅曾亮を中心とする京師桐城派がどのように生まれ、各地に拡大していったのかを明らかにしたい。

第一章 梅曾亮とその同人

梅曾亮の周囲に集まった人々は、劉聲木『桐城文學淵源考』巻七「此卷專記師事及私淑梅曾亮諸人」に、その名が見える。そのひとり秦細業が「伯言固より常に相い過從して、而も師友の間に在る者なり（伯言固常相過從、而在師友間者也）」（『虹橋老屋遺稿文』巻一「答裘葆良書」というように、彼らにとつて、梅曾亮は古文の師でもあり、年長の友人でもあった。そこで本章では、彼の周囲にどのような人々が集まってきたか、その交遊について論じていく。

まず、梅曾亮の経歴について簡単に見ておく。彼は字を伯言といい、上元の人である。嘉慶八年（一八〇三）、十八歳で姚鼐に弟子入りする。翌年、父に従つて一旦は江西に赴くが、二十歳からふたたび師の教えを親しく受けるようになり、姚鼐晩年の高弟と見なされるようになつていく。三十五歳で挙人となり、道光元年（一八二一）には進士に及第する。翌年には廣西に知県として赴くものの、すぐに病と称して辞した。その後、江南において約十年間活動している。

彼の転機となつたのは、道光十三年（一八三三）の二度目の上京である。翌年には賁によつて郎中となり、四十八歳から六十五歳まで、長く京師に滞在した。彼の周囲に集まつたのは、京朝官もいれば、まだ科挙に及第しない挙子もいた。その社会的地位によつて、梅曾亮を師としたり、友人とみなしたりした。その関係は姚門のような師弟関係と異なるので、本稿では、彼らを梅曾亮の同人として扱うことにする。そこで以下、秦細業「古杼秋館遺稿序」（『虹橋老屋遺稿文』巻二）を取りあげ、同人との交遊関係を見ていく。

秦細業は無錫の副榜で、父の秦瀛は姚鼐の弟子である。彼は道光十九年（一八三九）に上京し、梅曾亮の教えによつて古文義法に触れるようになる。「古杼秋館遺稿序」では、その同人について、次のようにいう。

時に朱侍御伯韓、余戸部小坡、邵舍人位西、陳上舍藝叔、曾閣學滌生、王戸部少鶴、馮刑部魯川の若きは、皆な好みて古文を爲るに必ず伯言を以て歸と爲し、少しも桐城の矩矱を踰ゆること無し（時若朱侍御伯韓、余戸部小坡、邵舍人位西、陳上舍藝叔、曾閣學滌生、王戸部少鶴、馮刑部魯川、皆好爲古文而必以伯言爲歸、毋少踰桐城矩矱）。

秦細業は、ここで朱琦、余坤、邵懿辰、陳學文、曾國藩、王拯、馮志沂の名を挙げる。それぞれ官名があるように、いずれも京朝官であり、同人の中心的存在である。彼らは古文執筆に際して、梅曾亮の教えに従い、桐城派の文学主張を奉じた。梅曾亮は同人に対して指導的立場にあり、同人は彼を通して桐城派の文学規範を受容したことがわかる。

梅曾亮が朱琦らをどう見ていたかは、彼の「贈余小坡敍」（『柏硯山房文集』巻三）からうかがうことができる。この作品において、彼は道光元年の上京を回顧し、そのときの知り合いは、二度目の上京では会えなくなつたと嘆く。その後、朱琦らと新たに交遊を結ぶが、その状況を次のようにいう。

之れを久しくして、交はりを陳君藝叔、朱君伯韓、吳君子紱に得て、又た伯韓に因りて交はりを小坡及び馮君魯川、王君少鶴に得。其の志趣同じくして常には合併せざる者、又た人有り。要は皆な雄俊の士にて、妄りに可を人に與へざる者なり（久之、得交陳君藝叔、朱君伯韓、吳君子紱、又因伯韓得交小坡及馮君魯川、王君少鶴。其志趣同而不常合併者、又有人焉。要皆雄俊之士、不妄與可於人也）。

梅曾亮はまず陳學文、朱琦、吳嘉賓と出会う。さらに朱琦を通じて、余坤、馮志沂、王拯と交遊を結ぶようになった。朱琦らとは十五歳以上、年が離れており、彼にとつては才能ある年少の同志であった。この序からは、梅曾亮が敬意を持って朱琦らと接し、友人として遇していたことがわかる。

一方、同人にとつては「伯言 京師に居ること久しく、文益ます老にして峻たり。吾が黨多く之れに従ひ遊ぶ（伯言居京師久、文益老而峻。吾黨多從之遊）」（朱琦『怡志堂文初編』卷六「自記所藏古文辭類纂舊本」というように、梅曾亮はグループの中心人物であった。ただし、彼らが師弟関係になかったことは、馮志沂「授經臺記」（『適齋文集』卷二）に次のようにあることからわかる。

道光の中、上元の梅先生伯言 古文詞を以て後學に提倡し、一時の京朝官 諸暨の余小頗、桂林の朱伯韓、新城の陳懿叔、馬平の王定甫ら諸子の如きは、時時酒を載せ先生に従ひて遊ぶ。余も亦た其の末に廁り、後進の禮を執る。未だ師弟子の稱を正さざると雖も、而れども文字を是正すること少しも假借せず。世の師弟子を名づくる者も、或ひは逮ばざるなり（道光中、上元梅先生伯言以古文詞提倡後學、一時京朝官如諸暨余小頗、桂林朱伯韓、新城陳懿叔、馬平王定甫諸子、時時載酒從先生遊。余亦廁其末、執後進禮。雖未正師弟子之稱、而是正文字不少假借。世之名師弟子者、或不逮也）。

ここには、新たに陳學受が加わっている。馮志沂は、梅曾亮に対して後進の禮を執るため、師弟関係ではないとする。しかし、常に酒宴をともにするだけでなく、遠慮せず作品を添削している点では、ほぼ師弟と同じであった。京朝官というように、朱琦らは官界で一定の地

位があつた。その社会的地位に遠慮して、梅曾亮は彼らの師とはならず、年長の同人としてふるまつたと考えられる。つまり、このグループは梅曾亮一門という上下関係ではなく、彼を中心とする京朝官のサロンと見なすことができる。

このグループには、梅曾亮の弟子も加わっていた。張岳駿、侯楨らである。張岳駿は金匱の諸生で、十年にわたつて彼に師事し、その高弟とされる。侯楨は無錫の挙人で、彼に師事し古文の法を受けている。その関係について、ふたたび「古杼秋館遺稿序」を見ることにする。

吾が邑には則ち張君端甫、侯君子勤有りて、先後して著録して弟子と稱す。二君も初め亦た乾嘉の時習に濡染す。梅先生に従ひて遊ぶに及びて、乃ち盡く其の平日爲る所の詩若び文を棄つるは、別に心得有らん。余も亦た相い砥礪して、毅然として斯文を以て自任す。吾が郷數十年も見ることに罕なるの絶學、一時にして吾ら三人を得るは、盛んなりと謂はざるべけんや（吾邑則有張君端甫、侯君子勤、先後著録稱弟子。二君初亦濡染乾嘉時習。及從梅先生游、乃盡棄其平日所爲詩若文、而別有心得焉。余亦相砥礪、毅然以斯文自任。吾郷數十年罕見之絶學、一時而得吾三人、可不謂盛與）。

ふたりは科挙に及第していないため、梅曾亮も遠慮なく弟子として受け入れた。彼らのもとと乾嘉の流行に馴染んだ詩文を執筆していたが、その指導を受けることで作風は一変した。梅曾亮の文学主張は、文壇の流行と一線を画すものだったことがわかる。張岳駿らは師弟関係を結ぶことで、絶學復興の一端に加わることになったのである。

ここまで、「古杼秋館遺稿序」を中心に、梅曾亮とその同人の交遊

について見てきた。京朝官であつた朱琦らは同人の中心であり、梅曾亮も年の離れた同志として扱つた。一方、挙子の張岳駿らは弟子として扱われるという、グループ内でも社会的地位の違いがある。その地位の違いにより、張岳駿が朱琦らに遠慮する場面も見られた。しかし、梅曾亮に心酔する点ではみな同じであり、地位の違いを超えて、彼らはグループの結束を強めていくのである。

第二章 酒宴を通じた文学交流

清代においても、知識人たちは「雅集」「小集」と呼ばれる酒宴を開き、詩文の応酬などして文学交流をおこなつた。馮志沂「余小頗先生詩序」(『適齋文集』巻二)が「後に君に因りて宣城の梅先生伯言及び桂林の朱伯韓、馬平の王少鶴、南豊の吳子序ら諸人を識り、文酒過従すること虚日無し(後因君識宣城梅先生伯言及桂林朱伯韓、馬平王少鶴、南豊吳子序諸人、文酒過従無虚日)」というように、梅曾亮は同人と日常的に酒宴を開いていた。そこで本章では、酒宴での詩文を取りあげ、その文学交流について論じていく。

梅曾亮が関わる最も盛大な酒宴は、彼が六十になつた寿宴である。この寿宴は道光二十五年(一八四五)三月二十五日に宣武門外の龍樹寺で開かれ、その重要性については、すでに前掲の柳春蕊、劉漢忠兩氏の論考にも言及がある。この酒宴は王拯と邵懿辰が主催し、ほかに朱琦、馮志沂、孔憲彝、秦緗業、王柏心、唐啓華、彭昱堯が出席した。彼らの詩文集には、この酒宴に関する作品が多く収録されている。

王拯「龍樹寺壽讌圖記」によれば、この宴席において、文章に優れた者が長寿であるという議論があり、「故に其の年益ます上る者、業益ます高し。宋の歐陽氏、明の歸氏、國朝の方氏、姚氏の若きは皆な然り。然らば則ち先生其れ未だ艾としよちに有ざるか(故其年益上者、業益

高。若宋歐陽氏、明歸氏、國朝方氏、姚氏皆然。然則先生其未有艾邪。)」という発言があり、梅曾亮が喜んだ。この発言に基づいて邵懿辰が文章を執筆し、冊子に書き留めたので、出席者の詩をそのあとに連ねることになった。このときの発言からは、歐陽脩、歸有光、方苞、姚鼐と並べ、梅曾亮を古文の大家として扱おうとする出席者の意図がうかがえる。

このとき梅曾亮を祝う詩のひとつに、朱琦「伯言先生の六十初度、同人 龍樹寺に集まり飲を設け詩を賦す。邵蕙西舍人の詩先づ成れば、因りて其の韻に次す(伯言先生六十初度、同人集龍樹寺設飲賦詩。邵蕙西舍人詩先成、因次其韻)」があり、ここでは次のように古文の系譜を詠んでいる。

桐城倡東南、文字出澹靜。

(桐城 東南に倡へ、文字 澹靜より出づ)

方姚惜已往、斯道墮塵境。

(方姚惜しむらくは已に往けば、斯道 塵境に墮つ)

先生年六十、靈光餘孤炯。

(先生年六十にして、靈光 孤炯に餘す)

絶學紹韓歐、薄俗厭鶉鷄。

(絶學 韓歐を紹ぎ、薄俗 鶉鷄を厭ふ)

ここでは、方苞、姚鼐亡きあと古文は絶え、梅曾亮のみが唐宋八大家の系譜を継承するという。ほかにも、王柏心「梅丈伯言の六十を壽としよちぐ(壽梅丈伯言六十)」にも「天其れ翁を以て文統を續がしめれば、翁の永としよちへに黄髮の期を保たんことを願ふ(天其以翁續文統、願翁永保黄髮期)」とあり、彼が文章の正統を継承することを期待している。同人にとつて、文壇の流行は軽薄で忌避すべきものであつた。そこ

で、彼を中心に古文復興をめざそうとした。梅曾亮を古文の継承者に位置づけることで、同人もまたその系譜に加わろうとしたのである。

六十寿宴以外にも、梅曾亮を囲んだ酒宴は、たびたび開かれていた。特に古人の生日を祝う酒宴は、彼らがめざす目標を共有する良い機会になっていた。『柏槻山房詩集』には、黃庭堅や顧炎武の生日記念の詩が見られるが、古文において敬意を示すのは、歐陽脩の生日記念である。特に注目すべきは道光二十七年（一八四七）の酒宴で、出席者の詩文が多く遺されている。この酒宴は、邵懿辰の寓齋において開かれ、梅曾亮のほかに朱琦、曾國藩、周學源、龍啓瑞、劉傳瑩、孫鼎臣が出席していた。そのひとり曾國藩は「丁未六月廿一、歐陽公の生日爲り。邵二の寓齋に集まり韻を分け、是の字を得（丁未六月廿一、爲歐陽公生日。集邵二寓齋分韻、得是字）」において、梅曾亮を次のように賞賛している。

梅叟名世姿、蕭然紅塵裏。

（梅叟の世に名ある姿、蕭然たり紅塵の裏）

蟬蛻三十年、萬事如脱屣。

（蟬蛻すること三十年、萬事 屣を脱ぐが如し）

獨留文章性、真好無遷徙。

（獨り文章の性を留め、真好 遷徙すること無し）

頗獎歐陽公、時時掛牙齒。

（頗る歐陽公を獎め、時時 牙齒に挂く）

後者開曾王、前追韓與史。

（後るる者は曾王を開き、前めば韓と史とを追ふ）

自叟持此論、斯文有正軌。

（叟此の論を持してより、斯文に正軌有り）

ここでは、雑事にかまけず古文に取り組む姿勢を賞賛している。梅曾亮は、歐陽脩が『史記』や韓愈を承け、曾鞏や王安石につなぐ功績を強調した。曾國藩は、彼が歐陽脩の功績を明らかにすることで、文壇は正道に立ち戻ったという。梅曾亮が古文の系譜を重視している点では、この曾國藩の評価は、六十寿宴の朱琦や王柏心と変わらない。ここから、酒宴を通じて、梅曾亮に対する同人の評価が共有されたことがわかる。評価を共有することで、グループ内での彼の求心力はますます強まることになった。

本章では酒宴での詩文を見ながら、同人が梅曾亮をどう評価したかについて論じてきた。取りあげた作品の多くで、その古文復興の功績が強調される。同人が彼に期待するのは、唐宋八大家、方苞、姚鼐の古文の系譜を継承し、軽薄な時流を一変させることであった。この古文復興は、グループ全体の目標にもなっていく。今回は大きな酒宴のみ取りあげたが、彼らの日常的な「小集」に至っては枚挙に暇がない。梅曾亮らにとって、酒宴はグループの目標を共有し、結束を強める上で重要な役割を果たしていたのである。

第三章 文学批評と義法の継承

酒宴で詩文を応酬する以外に、梅曾亮らにとって、作品批評も文学交流の重要な手段であった。論者はこれまで、桐城派形成における批評活動の重要性を指摘してきた。梅曾亮の文学主張の継承においても、批評活動が大きな役割を担っている。

同人が梅曾亮との交遊を語る場合、たびたび彼から作品の添削を受けたという。さらに同人のあいだでも、日常的にたがいの作品に批評を加えあっていた。ただし、彼らの詩文集が刊行される際には、評語や圈点が削られることも多い。そのため、現在では彼らの文学批評の

一部しか知ることはできない。それでも、朱琦『怡志堂詩初編』、朱蔭培『澹菴文存』、孔憲彝『對嶽樓詩續錄』の巻首には各家の評語が収録され、彭昱堯『致翼堂詩文集』、孫鼎臣『孫芝房先生文稿』、馮志沂『適齋文集』、余坤『寓庸室詩藁』などでは、作品ごとに批評が加えられている。本章では、これらの評語に考察を加え、梅曾亮らの文学活動における批評の重要性について論じていく。

今回取りあげる『寓庸室詩藁』一卷（一九一八年石印本）は、梅曾亮らの筆墨を影印したものであり、彼らの批評活動をうかがい知ることができる。巻首には張岳駿、秦細業、馬沅、宗稷辰、梅曾亮、朱琦、楊彝珍、吳嘉賓、王拯、陳溥の評語が並ぶ。各家の評語には、梅曾亮の「庚子の除夕、硃墨を以て敬みて讀むこと一過す（庚子除夕、以硃墨敬讀一過）」をはじめ、批評を加えた時期が記されている。それによれば、梅曾亮と朱琦の道光二十年（一八四〇）の評語が最も早く、道光二十四年（一八四四）の王拯のものが最も遅い。ここから、余坤の詩文は数年かけて同人に回覧されたと判断される。

『寓庸室詩藁』は収録作品の多くに、圈点と頭評がつけられている。巻首の評語から、その多くは梅曾亮の手によるものと推測できる。例えば、「圓明園に赴く車中に漫るそぞろに成る（赴圓明園車中漫成）」の頭評には「澹にして奇、甚だ惜翁に似るなり（澹而奇、甚似惜翁也）」とあり、その手本が姚鼐にあったことがわかる。また特記すべきものとして、巻末に収録される古文「駱東溪墓表」、「書周贈君行狀後」には、梅曾亮と姚鼐の総評が加えられている。この時期、姚鼐は京師におり、彼らと交遊があった。姚門の高弟ふたりに評語を書いてもらうのは、余坤にとって名譽なことである。ここでは「駱東溪墓表」の梅曾亮の評語を紹介する。

細さに之れを閲るに、亦た竟に古人に似ざること能はず。其の

敘事の生硬 韓に似て、其の議論に着く處、筆意の幽慘 王に似る。一折已に深けれど、能く更に一折を作す。此れ才力雄剛の處なり。曾亮讀む（細閱之、亦竟不能不似古人。其敘事生硬似韓、其着議論處、筆意幽慘似王。一折已深、能更作一折。此才力雄剛處。曾亮讀）。

再び閲ること一過すれば、全て是れ臨川に學ぶ。歐に於いては問ま其の意を取れども其の筆をのぼらず。曾亮讀む（再閱一過、全是學臨川。於歐問取其意而不摹其筆。曾亮讀）。

この評語では、作風に関して韓愈や歐陽脩を引き合いに出すものの、批評の主眼は、特に王安石に通ずる部分にある。このように、梅曾亮の判断基準は、主に唐宋八大家に近づくことにあった。一方、「一折已深、能更作一折」では、叙述の畳みかけ方を評価するように、作品構成に関する指摘もある。批評という行為は社交上のつき合いという側面もあるが、余坤への評語は、その内容から文章指導の一環であったと判断できる。さらに原稿を回覧することで、余坤だけでなく、ほかの同人もまた梅曾亮の指導を目にすることになる。このように批評を介して、同人は梅曾亮の文学主張を共有していった。

拙稿「鍾山書院を中心とした姚門の文学活動について」で見たように、姚門の批評では「裁制（斷制）」という評価視点がよく使われていた¹⁰。これと同じ視点は、朱琦の評語にも見える。彭昱堯「伊尹論」〔致翼堂文集〕巻一に附された頭評には「朱伯韓云ふ、收束の斷制謹嚴にして、筆力も亦た高古たりと（朱伯韓云、收束斷制謹嚴、筆力亦高古）」とあり、朱琦は「斷制」を使って、作品のまとめ方を論評している。この例からも、姚門の文学批評は、梅曾亮の同人にも共有されていたことがわかる。

文学主張が共有されていくうちに、彼らに党派意識が生まれるよう

になる。「歐陽生文集序」にある「桐城宗派」は、梅曾亮とその同人から使われ始めており、その正統意識が強く出ている。例えば、孔憲彝「罷むるを報ぜられ里に旋る途中寄せて諸君を懐かしむ（報罷旋里途中寄懷諸君）」（『對嶽樓詩續錄』卷一）では、梅曾亮のことを「望溪の宗派今ま猶ほ在り、惜抱の餘風幾輩か存す（望溪宗派今猶在、惜抱餘風幾輩存）」という。ここでは、梅曾亮を方苞の宗派、姚鼐の遺風の継承者としている。ほかにも、侯楨は「梅伯言師に質すに及びて始めて宗派を識る。復た何子貞、宗迪甫の兩先生と義法を參る（及質梅伯言師、始識宗派。復與何子貞、宗迪甫兩先生參義法。）」（『澹菴文存』卷首「侯序」といい、梅曾亮の指導によって、朱蔭培は「桐城宗派」について理解したという。

この侯楨のことは、評語によっても確認できる。「澹菴文存評語」に収録される梅曾亮の評語は、次のようにいう。

之れを太史に參り、其の潔を著すを以て、紀事に長ずる者なり。醞釀すること深厚なれば、桐城宗派に造るべし。甲寅の夏、伯言梅曾亮識す。（參之太史、以著其潔、長於紀事者也。醞釀深厚、可造桐城宗派。甲寅夏、伯言梅曾亮識。）

ここでは、朱蔭培が『史記』の簡潔さを表現できている点を評価しつつ、作品に厚みが増えれば、「桐城宗派」に到達できるだろうという。これは桐城派の正統に朱蔭培を導こうとする試みである。「桐城宗派」を目標にしていることから、彼らが単なる同人の集まりから、文学流派の一員へと自覚が変化していたことがわかる。

梅曾亮らが「桐城宗派」という党派意識を強めるにつれて、その文学理論として義法が強調されるようになる。先に見た侯楨の序でも、朱蔭培が何紹其や宗稷辰と義法を検討したという。その根拠となった

評語も「澹菴文存評語」に見える。

義法洞然として、筆力簡勁たり。多く作るに其の氣を充つるを以てせば、卓然として家を成す。子貞何紹其識す（義法洞然、筆力簡勁。多作以充其氣、卓然成家矣。子貞何紹其識。）

この評語は、梅曾亮と論点が一致している。朱蔭培の作品は簡潔さと力強さは十分だが、氣の厚みが足りないという。ここでは義法という観点から論評しており、何紹其のいう「成家」は、梅曾亮の「桐城宗派」に当たる。朱琦が「其の文を爲る義法は、一に之れを桐城に本づく（其爲文義法、一本之桐城。）」（『怡志堂文初編』卷六「柏硯山房文集書後」というように、梅曾亮にとっても、義法が古文執筆における規範となっていた。このように、彼らは義法を文章規範として採用し、批評にも用いていたのである。

義法重視のもうひとつの例として、王拯『歸方評點史記合集』の巻首「序」が挙げられる。それによれば、王拯が買収した『史記』の評点は、梅曾亮の鑑定によって、方苞のものと同判する。その結果「方氏 文を爲る義法に於いて講ずるも、而れども評點する所は則ち流播すること罕なり。故に余の此の傳本を得てより後、同遊奔走して相告げて假録に従ふ者、幾ど虚日無し（方氏講於爲文義法、而所評點則罕流播。故自余得此傳本後、同遊奔走相告從假録者、幾無虚日。）」というように、グループ内で伝本を抄写する者があつたことを絶たなくした。義法を習得するためには、方苞の手による評点が貴重な教材となるからである。この事実からも、グループ内でいかに方苞の古文と義法が尊重されたかがわかる。

梅曾亮らが義法を重視したのは、みずから桐城派の正統と位置づけるためであった。方苞が義法を主張してからも、劉大櫟や姚鼐はそ

れほど重視しておらず、桐城三祖に共通する文章規範ではなかった。その後、姚門の弟子になると、姚鼐から義法を教えられたという記述が散見されるようになる。さらに梅曾亮とその同人になると、義法の伝授がくり返し言及され、その重要性が強調される。この段階になって、義法は方苞個人のものでなく、古文執筆に必要な規範として一般化されたといえる。この新たな義法理解を示したことにより、梅曾亮らは桐城派内の新たな一派と見なされる。これにより京師桐城派が誕生したといえるのである。

本章では、批評活動を通して、梅曾亮らの党派意識の形成と文学主張の継承について考察してきた。彼らは積極的に義法を掲げるものの、義法に対する体系的な議論は、実はあまり多くない。それでも、姚門の梅曾亮から義法を学ぶことは、同人にとって意味がある。みずから方苞と姚鼐の系譜に連なると示せるからである。桐城派の正統と見なされるためには、方苞の義法を継承することが重要であった。義法の継承を標榜することで、梅曾亮は京師桐城派の宗主となり、文壇において彼のグループは影響力を強めていったのである。

おわりに

これまで、梅曾亮とその同人の文学活動について論じてきた。彼らは酒宴と批評を通して文学主張を共有し、党派意識を持つようになる。その結果、京師桐城派が新たに成立することになった。ただし、梅曾亮の周囲に集まった人々が、すべて同じ党派意識を持ったわけではない。持たなかったひとりが吳敏樹である。彼は「與梅伯言先生書」（『梓湖文集』巻七）では、梅曾亮への賞賛を惜しまないし、「與朱伯韓書」（『梓湖文集』巻七）でも、朱琦と古文について議論するよ

巻六）において、歐陽勳の父に対し桐城派への批判を展開する。そのなかで、文学流派の問題点を次のように指摘する。

文章藝術の流派有るは、此れ風氣大略之れ云ふのみ。其の間實は必ずしも相い師效せずして、或ひは甚だ同じからざるもの有り。而れども往往にして自ら能ふこと無きの人、是の名を假りて以て私かに門戸を立て、流俗を震動せんとす。反つて世の詬厲する所と爲りて、而も以て其の宗主する所の人を病ましむるなり（文章藝術之有流派、此風氣大略之云爾。其間實不必相師效、或甚有不同。而往往自無能之人、假是名以私立門戸、震動流俗。反爲世所詬厲、而以病其所宗主之人）。

ここでは、文学流派というのは流行を概観するものにすぎず、流派内で継承関係がなかったり、作風が大きく異なったりする場合もあるという。彼にとつて、文学流派を主張するのは、一派を立てることで世間を驚かそうとするにすぎない。この批判が梅曾亮らを想定しているのはまちがいない。現にこのあと吳敏樹は姚鼐を批判し、歐陽勳が梅曾亮の説に傾倒したことにも疑義を示している。京師桐城派が当時の文壇で流行したからこそ、このような批判が出てくる。吳敏樹が文学流派の意義を根本から否定したのは、それだけ京師桐城派の影響が大きかったことを示しているのである。

京師桐城派の成立によつて、梅曾亮は文壇の泰斗と目されるようになった。唐宋八大家以来の系譜や義法という文章規範は、現在の桐城派に対するイメージとほとんど変わらない。つまり、京師桐城派を以て、文学史上の桐城派は完成したといえる。その後、梅曾亮が南帰した道光二十九年（一八四九）に前後して、同人も次々と京師を離れていく。しかし、彼らは京師を離れてからも、往年のような文学活動を

続けていた。その一例として、廣西における朱琦、龍啓瑞、唐啓華らの交遊を最後に紹介する。唐啓華『涵通樓師友文鈔』巻首「叙」は次のようにいう。

其の後、伯韓 京師より歸り、翰臣も亦た歸り、時に唱酬有り。顧みるに頻年寇擾^をすを以て、團練に従事し、軍書彫雜なれば、復た曩日の文讌從遊の樂しみ無し。然れども其の夙昔に好む所の者は、忘るること能はざるなり(其後、伯韓自京師歸、翰臣亦歸、時有唱酬。顧以頻年寇擾、從事團練、軍書彫雜、無復曩日文讌從遊之樂。然其夙昔所好者、弗能忘也)。

道光三十年一月(一八五一)に太平天国の乱が勃発すると、南方は大混乱におちいり、知識人社会にも大きな被害が生じた。帰郷した朱琦も安穩とはできず、自衛のために軍事活動にいそむようになった。このような混乱のなかでも、彼らは京師での生活を懐かしみ、現地でも同じように詩文を応酬し続けた。晩清の社会不安のなか、京師桐城派の活動は地方に舞台を移していく。その結果、一時的な流行に終わることなく、文学流派として各地に根づいていくことになった。梅曾亮の上京以前、桐城派は師承、血縁、地縁を介して拡大していった。そのため、その活動はほぼ江南に限定されている。京師桐城派の特徴は、中国各地から集まる知識人の交遊に支えられた点にある。京師を舞台とした梅曾亮らの文学交流を介すことで、桐城派は全国的な発展を見せるようになったのである。

(注)

1 拙稿「姚門における八股文の評価」(『金城学院大学論集(人文科学編)』第六巻第一号、二〇〇九年)、「姚鼐における桐城派への所属意識について」

(同第十二巻第一号、二〇一五年)、「方東樹師弟が桐城派形成に果たした役割」(同第十一巻第二号、二〇一五年)、「江南における桐城派の拡大——吳德旋を中心にして」(同第十二巻第二号、二〇一六年)、「鍾山書院を中心とした姚門の文学活動について」(同第十三巻第一号、二〇一六年)を参照。

2 梅曾亮グループの交遊については、ほかに蕭曉陽『近代桐城文派研究』(中國社會科學出版社、二〇一六年)、張維「回歸文人……道光時期桐城派的選擇——梅曾亮推動崇尚歸氏古文風氣的原因和意義」(『安徽大學學報(哲學社會科學版)』第三十三巻第六期、二〇〇九年)、霍省瑞「嘉道時期桐城派興盛原因考論」(『安徽史學』二〇一二年第五期)、劉漢忠「廣西文人與晚清京師雅集」(『廣西地方志』二〇一五年第四期)などの論考がある。

3 『桐城文學淵源考』巻七は梅曾亮以外に三十七名を収録する。そのほかに、巻二収録の邵懿辰、巻四収録の宗稷辰、孔憲彝および曾國藩、巻六収録の彭昱堯および唐啓華、巻十一収録の王柏心も、梅曾亮らとの親密な交遊が確認できるため、本稿においてはその同人として扱う。

4 余坤について『桐城文學淵源考』では「余坤一」とする。本稿では『寓庸室詩藁』および進士題名碑の名に従う。

5 「張端甫遺集後序」(『怡志堂文初編』巻四)では、朱琦らが酒宴で雄弁に議論しているあいだ、張岳駿は「而れども君往來して其の間に遊讌するも、首を引き笑呢して、呐呐として口より出さず(而君往來遊讌其間、引首笑呢、呐呐不出口。)」という状態であり、朱琦らの議論には参加していない。この遠慮は彼の性格もあるだろうが、地位の違いも影響していたと考えられる。

6 この寿宴に関して、以下の作品が確認できる。

王拯「三月廿五日、梅伯言先生(曾亮)六十生日、同人讌集龍樹寺、次邵位西舍人(懿辰)韻。三首」(『龍壁山房詩草』巻二)、同「龍樹寺壽讌圖記」(『龍壁山房文集』巻五)、邵懿辰「龍樹寺壽讌詩序」(『半巖廬遺文』巻

一)、同「集龍樹寺、壽伯言六十」(『半巖廬遺詩』卷一)朱琦「伯言先生六十初度、同人集龍樹寺設飲賦詩。邵蕙西舍人詩先成、因次其韻」(『怡志堂詩初編』卷五)、馮志沂「乙巳三月二十五日、伯言先生六十生辰、同人觴集龍樹寺、次邵位西舍人韻。二首」(『微尚齋詩集初編』卷一)、孔憲彝「三月廿五日梅伯言文六十初度、同王子壽、朱伯韓、邵蕙西、彭子穆、秦澹如、王少鶴、馮魯川、唐子實、集龍樹寺、置酒爲壽」(『對嶽樓詩續錄』卷三)、王柏心「壽梅丈伯言六十」(『百柱堂全集』卷十)、彭昱堯「三月二十五日、同朱伯韓(琦)侍御、王定甫(錫振)農部、王子壽(柏心)馮魯川(志沂)兩比部、唐子實(啓華)孔繡山(憲彝)兩孝廉、秦澹如(細業)上舍、集龍樹寺爲梅伯言(曾亮)先生作生日、次邵蕙西(懿辰)舍人。兩首」(『致翼堂詩集』卷三)。

7 このときの作品は、以下が確認できる。

梅曾亮「六月二十一日歐公生日、集邵位西寓齋。朱伯韓、曾滌生、周眠帆、龍翰臣、劉蕉雲、孫芝房與曾亮凡八人、以天下文章莫大乎是分韻、得平字。芝房編修是日撫琴」(『柏榭山房詩集』卷八)、邵懿辰「廬陵先生生日讌客記」(『半巖廬遺文』卷一)、朱琦「六月二十一日、邵蕙西招集同人、爲歐陽文忠公作生日。會者凡八人、梅伯言農部、曾滌生閣學、龍翰臣侍講、孫芝房編修、劉椒雲學博、周子靜孝廉、以天下文章莫大乎是分韻、得下字」(『怡志堂詩初編』卷五)、曾國藩「丁未六月廿一、爲歐陽公生日。集邵二寓齋分韻、得是字」(『曾文正公詩集』卷一)、龍啓瑞「六月二十一日、歐陽文忠公生日也。蕙西同年召集其齋、拜公遺像。同人即席分賦、得章字」(『浣月山房詩集』卷二)。

この酒宴のあと邵懿辰が戴熙に『醉翁亭圖』を依頼したことは、この会を欠席した王拯の「歐陽公生日、詩同人悉作古體。復用顏韻、疊成二章」(『龍壁山房詩草』卷六)注などに見え、欠席者にとつても関心の高い酒宴であったことがわかる。

8 前掲のもの以外に、拙稿「方苞の『義法』と八股文批評」(『日本中國學

會報』第五十三集、二〇〇一年)、「劉大櫟の文論と八股文批評」(『金城学院大学論集(人文科学編)』第二巻第二号、二〇〇六年)において、文学批評が桐城派形成に果たした役割について考察している。

9 本文で紹介する『寓庸室詩藁』以外に、『怡志堂詩初編』巻首「評跋」には梅曾亮及び龍啓瑞、孫衣言、孔憲彝らの十三名の評語を、『澹菴文存』巻首「澹菴文存評語」には梅曾亮や朱琦ら五名の評語を、『對嶽樓詩續錄』巻首「評跋」には梅曾亮や秦細業など十五名の評語を収録する。また、『致翼堂詩文集』には、梅曾亮、朱琦、龍啓瑞、唐啓華らの頭評、夾評、総評が作品ごとに附される。このほかに、『孫芝房先生文稿』には吳敏樹、朱琦、王拯の総評が、『適適齋文集』には王拯の総評が附されている。

10 「裁制」の重要性について、姚鼐「與陳碩士」(『惜抱先生尺牘』巻六二十六葉表)では「必ず簡峻なるを欲すれば、更に荆公の爲る所を讀むに若かざるは、則ち筆間に自ら裁制有ればなり。敘事の文、繁冗の累ぬる所と爲れば、則ち氣流行自在なること能はず。此れ知らざるべからざるなり(必欲簡峻、莫若更讀荆公所爲、則筆間自有裁制矣。敘事之文、爲繁冗所累、則氣不能流行自在、此不可不知也。)」という。梅曾亮は同じ視点で、陳兆麒「項伯論」(『蘭軒文集』巻一)に「斷制老辣たり、諸論當に此れを以て第一と爲す(斷制老辣、諸論當以此爲第一。)」という評を加えている。

11 梅曾亮の離京に先立ち、道光二十四年(一八四四)、余坤が四川へ赴任している。道光二十五年(一八四五)には王拯、唐啓華、道光二十七年(一八四七)には朱琦が廣西へ帰郷するため京師を離れた。また、梅曾亮の送別の宴には、邵懿辰、孔憲彝、曾國藩、邊浴禮、秦細業、馮志沂、何秋濤、黃彭年が出席していた。その後は、道光三十年(一八五〇)に龍啓瑞が父の服喪のため廣西に、咸豐二年(一八五二)に曾國藩も母の服喪のため湖南に帰郷している。